

# マルコによる福音書 2 章 23 節～3 章 6 節

2014 年 11 月 27 日

古本 靖久

1、聖歌 212 番 「天と地と海 生きものすべて」

2、お祈り

3、テキストの位置

ここまで、イエス様のガリラヤとカファルナウムを中心とした活動を見てきました。いやしの物語に続き、前回同様イエス様は自分に敵対する勢力との論争に挑みます。

治癒物語	1:21-45	多くの人をいやす
治癒と論争	2:1-12	中風の人をいやすと論争
論争物語	2:13-17	見捨てられた人と共にいる
	2:18-22	古いものと新しいもの
	2:23-28	安息日の行い
	3:1-6	安息日のいやし

特に今回は、安息日律法というユダヤ人、特に宗教権威者が大切にしているものがテーマとなり、イエス様と彼らとの対立は広がっていきます。そして 3 章 6 節において、彼らとイエス様との溝は決定的なものになったと報告するのです。

この 3 章 6 節までが、マルコ福音書の第一部です。この中ですでに、イエス様がどのようにして受難への道を進むようになったのか、何が対立の原因だったのか、マルコは読者に示していきます。

4、1 節ごとに

## ◆安息日の行い

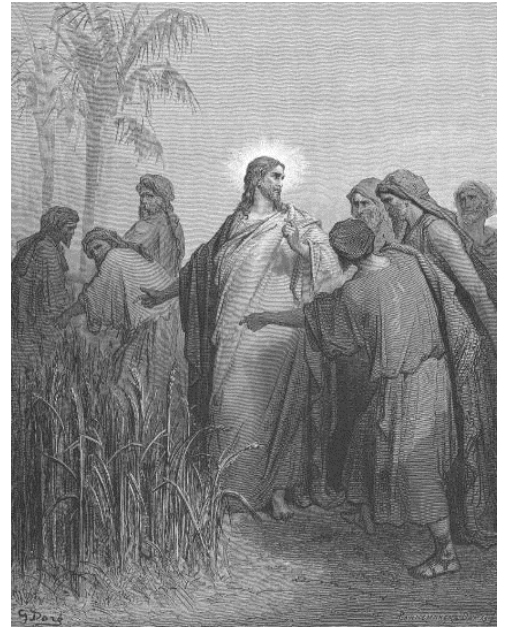
**2:23** ある安息日に、イエス(彼)が麦畑を歩いて行かれると(いうことがあった。そして)、(彼の)弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた(ながら進んでいった)。

ある安息日のこと、イエス様の弟子たちは、歩きながら麦の穂を摘んでいました。当然食べようとしたのでしょう。わたしたちの感覚だと、「何と行儀の悪い」と叱られる行為です。また黙って人の土地の作物を取るわけですから、泥棒だと思われても仕方ありません。

しかしこれは、ユダヤの社会では認められている行為でした。申命記 23 章 26 節によると、人の畑であっても鎌さえ使わなければ、麦の穂を摘むことは許されていたのです。

**2:24** (そして) ファリサイ派の人々がイエス(彼)に、「御覧なさい(見よ、)。—なぜ、彼らは安息日にはしてはならない(許されていない)ことをするのか」と言った。

そこに突然ファリサイ派の人々があらわれます。彼らはどこにいたのでしょうか。安息日には800mしか歩くことが許されていないのに、麦畑の中に彼らがいることに違和感を覚えます。しかしここで重要なのは、イエス様とファリサイ派の間で論争が起こったということのみです。それ以外の場面設定は、さほど大切ではありません。



さて、弟子たちの行為の何が「許されていない」行為なのでしょう。出エジプト記 34:21 には「あなたは六日の間働き、七日目には仕事をやめねばならない。耕作の時にも、収穫の時にも、仕事をやめねばならない」とあります。このことから、安息日には耕作と収穫をおこなってはいけないと解釈されていました。そのようにして 39 の禁止行為が定められ、さらに細かい決まりが作られていきます。

ファリサイ派は「麦の穂を摘む」ことを、「収穫」とみなしたようです。このようにファリサイ派は、細かい律法解釈には無頓着で、いつもどおりのことをそのまま安息日にも行なう人たちの「無知」を責めていました。

**2:25** (そこで) イエスは(彼らに)言われた(う)。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物もなく(困って)空腹だった(飢えた)ときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。

イエス様はファリサイ派に問い返します。「一度も読んだことがないのか」という言い方は、当時のラビ(教師)たちがよく用いた反対質問の形式だそうです。

ダビデは旧約に出てくる王です。イエス様は旧約聖書の記述の中に、律法に従わなかった事例があることを示します。しかしそこには理由が必要でした。「困って、飢えた」という状態だったからこそ、ダビデは律法を破っても咎められなかったのです。

ところがこの箇所では、弟子たちは食べるものに困っていたとも書かれておらず、飢えてもいませんでした。(並行箇所のマタイ 12:1 では飢えていたと書かれています)。したがって、律法を破ってもよい危急性があるわけでもなく、イエス様の回答は屁理屈と言われても致し方ないものです。

**2:26** アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも(しか) 食べてはならない (ることの許されていない) 供えのパンを食べ、(また) 一緒にいた者たちにも与えたではないか (ということを)。

これはサムエル記上 21 章 1～6 節に出てくる出来事です。ただしその時の大祭司は、アビアタルの父アヒメレクでした。マルコ福音書が書かれた頃、聖書の書物は独立した巻物であり、とても貴重でした。ですから旧約の記述を確認しながら福音書を書くことはできなかったと思われます。マタイとルカはこの間違いに気づいたのでしょう。並行記事では大祭司の名前は削除され、単に「神の家に入り」となっています。

このイエス様の言葉を聞いて、ファリサイ派は首をかしげたと思います。どうして弟子たちの行為が許されるのかと、感じていたかもしれません。

**2:27** そして更に (彼らに) 言われた。「安息日は、人のために定められた (あるのであって)、人が安息日のためにあるのではない。

ここでイエス様は、安息日とは何なのかを端的に伝えます。十戒の一つである安息日は、神さまからの賜物として与えられました。もともとは、七日目に労働から解放され、奴隷も家畜も休息が与えられるという恵みの日であったのです。しかしそれがいつの間にか、人間の生活を圧迫していくものとなっていきました。

そこでイエス様は言われるのです。そのような律法の規定よりも、人間の存在の方がはるかに上であると。決して律法をないがしろにするわけでも、人間がすべてを決定してもよいのだということを言っているのではありません。むしろ神さまがなぜ律法を与えられたのかということについて、正しい解釈を述べておられるのです。

**2:28** だから、人の子は (また) 安息日の主でもある。」

さらにイエス様は言われます。人の子、一人の人間として来られたイエス様は、安息日の主でもあると。これはどういうことでしょう。

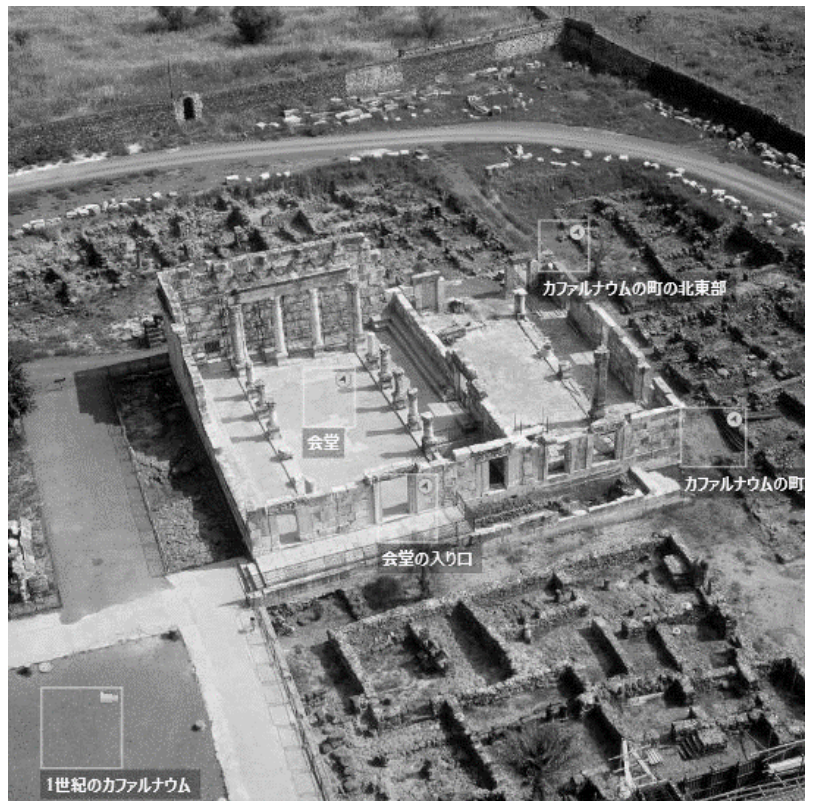
これは少し解釈が入るのですが、わたしはイエス様が再び安息日を元の形に戻されるということだと思えます。つまり人々にとって、特に「地の民」と言われた律法をきちんと守ることのできない人々にとって、安息日などの規定は「重荷」でしかありませんでした。しかしイエス様が安息日の主となることで、再び律法は神さまからの賜物として、人間に対する助けとして、人々に関わっていくということではないでしょうか。

## ◆安息日のいやし

3:1 (そして) イエスはまた会堂にお入りになった。(そして) そこに片手の萎えた人がいた。

イエス様は会堂に入られます。麦の穂を摘んだ日とは別の日だと思われませんが、この日も安息日です。イエス様が安息日に会堂に入る描写は、マルコにはほかにも 1:21-28 や 6:1-6 に出ています。イエス様はそこで人々を教えていました。

そしてそこには「片手の萎えた人」がいました。自分の意志で来たのでしょうか。それとも悪意をもった人たちに連れてこられたのでしょうか。何も書かれていません。「萎える」とは、直訳では「枯れてしまう」、麻痺をしてしまった状態にあるということです。



3:2 人々はイエス(彼)を訴えようと思って(告発するために)、(彼が)安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目して(窺って)いた。

人をいやすということは、医療行為として労働とみなされていました。したがって、安息日にはいやしてはならないのです。しかし人々は、イエス様はきっといやされるだろうとの思いもあったのかも知れません。彼らはイエス様を律法違反で告発するために、会堂に集まっていました。

ところで新共同訳で「注目していた」という言葉は、悪意をもって窺うという意味を持ちます。彼らの中には驚きや期待ではなく、悪意が渦巻いていたのです。

イエス様は手が萎えた人をいやすのでしょうか。生死に関わる状況の時には、安息日にいやしても何ら問題はありませんでした。しかし、片手が萎えた人のいやしは、安息日には行う必要はないとされていたのです。ちなみにルカ福音書は、「片手」を「右手」として、彼の惨状を強調しようとしています。さらに聖書の中には収められなかった「ナザレ福音書」では、彼の職業を石工として紹介しており、手が萎えることは仕事をすることが出来ない、つまり緊急性があることだということを匂わせます。

3:3 (そして)イエスは手の萎えた人に、「(立って)、真ん中に立ちなさい」と言われた(う)。

イエス様は手の萎えた人に向かって、命じます。彼はいやして欲しいと言っておりませんし、イエス様が彼の信仰を認めたとも書かれていません。ただ一方的に、「立って、まん中へ」と命じます。この「立つ」というギリシア語は「起き上がる (エゲイロー)」という語です。何度か説明しましたが、「復活する」という意味も持つ語です。会堂の片隅に座っていた彼は、イエス様によって起き上がらせられ、イエス様の元へと招かれるのです。

3:4 そして人々(彼ら)にこう言われた(う)。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。

安息日に許されているのは、と聞くイエス様。ここではイエス様は律法本来の意味ではなく、ユダヤ教の法的な発想ではどうなのか、ということを知っています。善をおこなうことが、そして命を救うことが正しいことはだれもが知っています。しかし、ファリサイ派の律法解釈に照らした時に、それは一体どうなのだ、と聞くのです。

律法主義であることによって、ファリサイ派は目の前の人を助けることをせず、自らの慣習を守ろうとします。そのことはイエス様から見ると、悪をおこなうことであり、殺すことなのです。彼らは黙っていました。「イエス様の言うとおりで。もう降参です」との思いではなく、頭の中には怒りが渦巻いていたに違いありません。なぜなら彼らは、自分たちが信じている律法の絶対性を否定されたからです。

3:5 そこで、イエスは怒って(怒りを持って)人々(彼ら)を見回し、彼らの(心の)かたくなな心(さ)を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた(う)。(そして)伸ばすと、(その)手は元どおりになった。

イエス様は彼らを見回します。わかりきった答えを誰一人として口にしないことに怒りながら。彼らの心はかたくなでした。この語は「感覚が鈍い」、つまり今苦しんでいる人の心を共感できないというニュアンスもありますが、「理解の欠如」や「愚かさ」という意味も含まれます。つまり、自分たちを律法主義の束縛から解放する新しい教えを、彼らが理解できなかったことを意味します。出エジプトの時のモーセたちに対するファラオのかたくなな心を思い起こします。

「手を伸ばしなさい」と言われた手の萎えた人。恐る恐る手を伸ばしたのでしょうか。イエス様に一言二言、何か言ったのでしょうか。その情景は一つ書かれていません。聖書が伝えたかったこと。それは、「手は元どおりになった」、そのことだけなのです。

3:6 ファリサイ派の人々は出て行き、早速（すぐに）、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエス（彼）を殺そうかと相談し始めた。

ファリサイ派の人たちには、政治的な権力はありませんでした。そこでヘロデ派の所に行ったと思われます。このヘロデ派という集団は、古代のいかなる文献にも出てきません。ヘロデ・アンティパスの支持者や家臣からなる貴族階級であったのか、それともマルコ福音書の記者が作った造語なのか、しかしイエス様に敵対する勢力であることだけは確かです。

ファリサイ派の人たちは会堂から出て行きました。これは最初の論争物語が終わったことを示します。彼らは中風の人をいやすイエス様を見て、神を冒瀆していると考えました。そして今、安息日を彼らの尺度で守ろうとしないイエス様を殺そうとするのです。

イエス様の最初の活動はこのように進んでいきます。イエス様は伝道し、弟子を招き、多くの人をいやしました。しかし宗教権威者との論争によって、イエス様は十字架への受難の道を、確実に進んでいくことがすでに示されたのです。

#### <今回の箇所から>

イエス様はなぜ論争の種になるようなことを、わざわざ引き起こされるのでしょうか。人をいやすことは大事です。でもわざわざ安息日にしなくてもいいのではないかと思います。

しかしイエス様は、彼らの解釈による安息日の禁止事項をおこないません。律法の枠組みの中で許される範囲のことだけをし、困っている人がいても見て見ぬふりをする。さらに自分と同じよう行動するようにと、他人を強いる。ファリサイ派がその自分の姿に気づくように、イエス様は行動されます。

けれども、これらの言葉は果たして 2000 年前のファリサイ派だけに語られている言葉でしょうか。わたしたち人間は決まりごとが好きです。自分はともかく、規則で他人を縛ることが大好きです。法律、校則、そして礼拝堂でのマナーなど。

宗教権威者は神さまを冒瀆されたと感じ、傷つけられ、異端者であるイエス様を殺す相談をします。彼らはイエス様が自分たちを批判していることに気づきました。だから行動を起こしました。わたしたちはどうでしょう。「あなたたちは善をおこなうのか、悪をおこなうのか」と聞かれた時、はっきりと「善をおこなう」と言えるのでしょうか。

今回の学びは、これで終わります。次回は 12 月 25 日(木)13 時～です。「湖の岸辺の群衆、十二人を選ぶ（マルコ 3：7～19）」について学んでいきます。